

マジック・ランタン 光と影の映像史

The Magic Lantern: A Short History of Light and Shadow

2018年8月14日（火）－10月14日（日）



作者不詳（マジック・ランタンのトレード・カード）
19世紀頃 リトグラフ 東京都写真美術館蔵

近年注目を集める、プロジェクション・マッピングやパブリック・ビューイングなど、人々がひとつの映像を一緒に見るという行為は、いつ、どのように生まれ、我々の社会に定着するようになったのでしょうか。スクリーンや壁に映像を投影する「プロジェクション」という行為は、映画の発明より遡ることはるか以前に、マジック・ランタンと呼ばれる現代のプロジェクターの原型にあたる機構の発明により、世界中に広がりました。本展では映像の歴史を、プロジェクションの歴史という視点から見直し、映像史の新たな側面を照らし出すことを試みます。

東京都写真美術館が所蔵する初期映像史に関する豊富なコレクションの中には、マジック・ランタンや映画の誕生以前に生まれた、数々の映像装置や資料が含まれます。光と影がつくりだす美しく不思議な世界は、日本では、写し絵や錦影絵、幻燈という名前で古くから親しまれてきました。光と影によってもたらされる映像の歴史を、マジック・ランタンをはじめとする当館コレクションを中心に紹介いたします。また、近年「視覚文化史研究」や「メディア考古学」と呼ばれ注目をあつめる光学機器や視覚装置の歴史について、最新の研究成果をわかりやすく紹介し、映像文化の過去を振り返ることで、現代の映像表現や映像文化を考察します。

展示構成（出品点数 153 点 ※詳細は別紙作品リストをごらんください）

1 マジック・ランタンの誕生 / The Birth of Magic Lantern

マジック・ランタンは、17世紀の半ばにオランダのクリスティアン・ホイヘンスによって発明された投影装置です。マジック・ランタンは18世紀を通じ徐々にヨーロッパ各地に広がり、その用途も顕微鏡や望遠鏡と並ぶ学術的な使用目的から、興行師や旅芸人による娯楽産業への利用まで幅広く、「プロジェクション」という実践を人々に普及・定着する大きな役割を果たしました。18世紀半ばにドイツやフランスで流行した影絵（芝居）も、マジック・ランタンの人気を後押しします。ここではマジック・ランタンの流行を準備することとなった、影絵とファンタスマゴリア*を中心に、光と影による映像文化をご紹介します。

*ファンタスマゴリア・・・18世紀末に登場した、マジック・ランタンを用いたホラー・ショー。専用のランタン「ファンタスコープ」を使用し、観客に見えない場所から恐ろしい幽霊・亡霊を投影する。フランスのパリを中心に爆発的に流行したことが知られている。



1



2



3

- 1 : ウジェーヌ・シャルル・フランソワ・ゲラルド 《旅人たち #18: 魔女の穴（黒い森）での昼食》 1854年 リトグラフ、手彩色 東京都写真美術館蔵
- 2 : (ファンタスコープ・モルテニ、モルテニ製) 1830-50年 木、真鍮 ※世界に4点のみ現存するうちの1点を展示します
- 3 : (ファンタスマゴリアのスライド) 1830-50年 ガラス、木、真鍮 東京都写真美術館

2 マジック・ランタンの流行 / Magic Lantern Mania



作者不詳（マジック・ランタンのトレード・カード）19世紀、リトグラフ

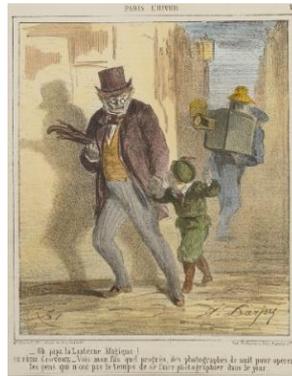
19世紀に入るとマジック・ランタンの人気は一層高まり、一般家庭でも購入・操作できるほど安価かつ簡易な構造の機器が出回るようになります。また、学術的な場面や興行での使用においても、レンズや光源の改良、シャッター機能等の向上により、投影装置としての精度が高まってきました。ここでは、「科学の眼」、「興行」、「家庭のあそび」とセクションを分け、さまざまな用途と形態のマジック・ランタンをご紹介します。



1



2



3



4



5



6

- 1 : (バイユニアル・マジック・ランタン) 1880-1890年頃 ブリキ、木 東京都写真美術館蔵
- 2 : カルル・ヴェルネ《オルガン弾き、覗いてびっくりマジック・ランタン》1820年頃 リトグラフ、手彩色 東京都写真美術館蔵
- 3 : アルフレッド・ダルジョワ《あっ、パパ、マジック・ランタン!》『冬のパリ』『ル・シャリヴァリ』より 1964年頃 リトグラフ 東京都写真美術館蔵
- 4 : (ランパスコープ・プール、ラビエール製) 1880年頃 亜鉛と鉛の合金、ブリキ 東京都写真美術館蔵
- 5 : (ランテルヌ・リシュ、ラビエール製) 1880年頃 ブリキ 東京都写真美術館蔵
- 6 : (ランパドフォル・プール、ラビエール製) 1880年頃 ニッケル黄銅 東京都写真美術館蔵

3 日本のマジック・ランタン / Magic Lantern in Japan



1



2



3



4

- 1 : 楊洲周延《幻燈写心鏡 勤進帳》横山良八発行 1890年錦絵(木版多色摺り) 個人蔵
- 2 : (種板) 19世紀頃 ガラス、木 東京都写真美術館蔵
- 3 : (写し絵風呂) 19世紀頃 木 東京都写真美術館蔵
- 4 : (箱・種板付き幻燈機) 19世紀頃 ブリキに水銀朱の塗装、ガラス、木 東京都写真美術館蔵

マジック・ランタンは、江戸時代に日本に渡来したことがわかっています。日本においては当初、見世物や寄席文化と親和性が高く、オランダ渡来の珍しい興行として楽しまれ、国内各地で独自の発展を遂げていきます。渡来当初は「影絵燈籠」や「現妖鏡」といったさまざまな名前と呼ばれ、プロジェクションをおこなう機器をどのように呼びならわすべきか、既存の文化を基に、人々が頭を捻り様々な呼称を生みだしたことがうかがえます。その後、日本各地で呼び名は異なりますが、江戸(関東)では「写し絵」、上方(関西)では「錦影絵」という名前で定着しました。また、明治期に入ると、政府主導により最新の教育機器として、マジック・ランタンは「幻燈」という名前を与えられ、新たに普及が進められていきました。幕末・明治期の浮世絵師・楊洲周延による《幻燈写心競 勸進帳》では、若い女性が心に抱く役者へ思慕が、当時流行していた幻燈の映すイメージに重ねて描かれています。マジック・ランタンが長い歳月や場所を超えて普及していくなかで、その映像技術が、いつの時代も人の情念に強く結びついているものであったことがわかります。

4 スライド / Slides

マジック・ランタンは通常、ガラス板に描かれた絵を投影します。東京都写真美術館のコレクションには、ファンタスマゴリアに用いられた幽霊や天使のスライドや、仕掛けによって絵が動くスライド、絵ではなく写真が焼き付けられたスライドなど、多種多様なスライドを所蔵しています。スライドによっては、文字が書き込まれ、物語のストーリーをみるものに伝え、また弁士やパフォーマーによって読み上げられるといった、上映形態を想像させるスライドも含まれます。



1



2



3

1、3：(クロマトローブ) 19世紀頃
ガラスに手彩色、木あるいは真鍮、ブリキなど
東京都写真美術館蔵

2：(噴水の仕掛けスライド) 19世紀頃
ガラス、木 東京都写真美術館蔵

5 マジック・ランタン以後 / After the Magic Lantern

マジック・ランタンが発明されてから約 200 年後、リュミエール兄弟によってシネマトグラフが発明されます。映画はマジック・ランタンが創り出したプロジェクション文化の、新たな形態であったといえるでしょう。映画発明当時の作品・資料を展示するとともに、マジック・ランタンを現代における映像表現と結び付け、現代美術家・小金沢健人によるプロジェクションを用いた作品を紹介します。

投影の現在 / Projections Today

投影の現在を代表する作品として、小金沢健人の最新作《よびつぎうつし》を紹介します。映像を軸に、パフォーマンス、ドローイング、インスタレーションへと表現の幅をひろげ、世界の注目を集める作家の世界をお楽しみください。

本展のみどころ

「みんなで見ること」のはじまりはマジック・ランタンにあり

日常的に接する機会のある映画や、パブリック・ビューイング、昨今大流行したプロジェクション・マッピングなどは、同じ空間に集まった多くの人々が同時に映像(イメージ)による体験を共有するものです。これらの映像体験の起源は、17世紀半ばの「マジック・ランタン」の発明に遡ります。映画の発明よりもはるか昔に発明された「みんなで視覚体験を共有する」ための技術は、時代のニーズに応えながら、今日まで発展し続けています。本展はプロジェクション・マッピングの原点であるマジック・ランタンに焦点をあて、映像文化の発展に迫ります。

日本随一のマジック・ランタン・コレクションで、写真と映像の交差点を知る

光学レンズの発明とともに発展したマジック・ランタンは、「内から外」に向けて光を映し出し、一方でカメラの原型にあたるカメラオブスクラは「外から内」に映し出すことを基本原理としています。マジック・ランタンの発展途上で、外側に光を放つ「映像」と、内側に光を集める「写真」が分化し、独自の技術発展を遂げましたが、元は同じ「光と影による芸術」であるといえます。本展は当館が写真と映像の専門美術館として、総合開館時より重点的に収集してきた初期映像史に関する貴重なコレクションをご紹介します。日本随一の規模を誇るマジック・ランタンとそのスライド(種板)の数々をお楽しみください。最新の研究で明らかになった知られざる映像史も紐解きます。

プロジェクション今昔 — 気鋭アーティスト・小金沢健人の新作登場！

本展ではアジア・アート・アワード 2018 で大賞を受賞した気鋭のアーティスト・小金沢健人による新作を出品します。最新技術を使ったプロジェクション・マッピングの現在を体現するインスタレーションにご注目下さい。また、関連企画として、日本のアニメーションの原型といわれる「江戸写し絵」を現代に再現する、公演「納涼江戸写し絵の夕べ」と、「写し絵オープンワークショップ」を開催します。脈々と続くプロジェクションの歴史を体感する本展の目玉として、江戸時代の写し絵あそびを体験できる貴重な機会をお見逃しなく！



参考図版

小金沢健人《速度の落書き》2008年
ビデオ・インスタレーション、サイズ可変 作家蔵

関連イベント

アーティストトーク

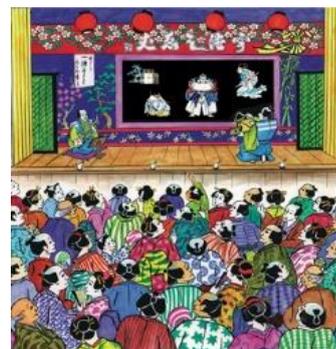
日時 | 2018年8月18日(土) 14:00-15:00

出演 | 小金沢健人(出品作家)

定員 | 50名 ※先着順、立ち見可

会場 | 東京都写真美術館 2階ロビー

参加費 | 無料



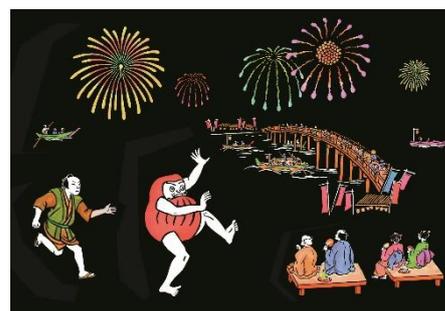
「江戸写し絵」社中旗揚げ公演「納涼江戸写し絵の夕べ」

日時 | 2018年8月24日(金) 19:00-20:00

定員 | 50名 ※先着順、立ち見可

会場 | 東京都写真美術館 2F ロビー

参加費 | 無料



「江戸写し絵」社中旗揚げ公演 参考図版

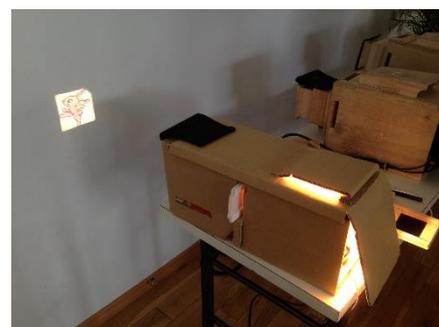
「江戸写し絵」社中による写し絵オープンワークショップ

日時 | 2018年9月1日(土) 14:00-17:00 [予定]

会場 | 東京都写真美術館 1F スタジオ

対象 | どなたでもご参加いただけます。

参加費 | 詳細はホームページにてお知らせいたします。



マジック・ランタンをめぐるレクチャー

日時 | 2018年9月29日(土) 14:30-16:30 [14:00 開場予定]

出演 | 草原真知子(メディア文化論研究者)、松本夏樹(映像文化史家)、岩田託子(中京大学教授)

定員 | 190名

会場 | 東京都写真美術館 1F ホール

参加費 | 無料

※整理番号順入場、自由席

※当日10時より1Fホール受付にて整理券を配布します。



「江戸写し絵」オープンワークショップ 参考図版

展覧会担当学芸員によるギャラリートーク

会期中の第1・第3金曜日 14:00 より、および、サマーナイトミュージアム期間中の8月31日(金) 18:10 より、担当学芸員による展示解説を行います。

展覧会チケット(当日消印)をご持参のうえ、地下1階展示室入口にお集まりください。

たのしむ、もらう「TOP スタンプラリー」

トップミュージアムでは、3つの展覧会をたのしんで、TOP オリジナルグッズがもらえるスタンプラリーを開催中です。対象の展覧会を観覧してスタンプを集めると、オリジナルグッズがもらえます。

<対象展覧会>

TOP コレクション たのしむ、まなぶ「イントゥ・ザ・ピクチャーズ」展 [開催期間:8月5日(日)まで→会期終了]

TOP コレクション たのしむ、まなぶ「夢のかげら」展 [開催期間 2018年8月11日(土・祝)~11月4日(日)]

映像展「マジック・ランタン 光と影の映像史」展 [開催期間 2018年8月14日(火)~10月14日(日)]

*スタンプラリー開催期間 開催中~2018年11月4日(日)

*スタンプカード配布期間 開催中~2018年10月14日(日)

*グッズ交換期間 2018年8月11日(土・祝)~11月4日(日)



展覧会カタログ

本展の開催にあわせて展覧会カタログを発行いたします。

『マジック・ランタン 光と影の映像史』

執筆 遠藤みゆき (東京都写真美術館学芸員)

エルキ・フータモ (カリフォルニア大学ロサンゼルス校教授)

草原真知子 (メディア文化論研究者・早稲田大学名誉教授)

発行 株式会社青弓社

価格 2,592円(税込)

開催概要

- 主催 東京都 東京都写真美術館、日本経済新聞社
協賛 凸版印刷株式会社
会期 2018（平成30）年8月14日（火）～10月14日（日）[55日間]
会場 東京都写真美術館 地下1階展示室
〒153-0062 東京都目黒区三田 1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内
Tel 03-3280-0099 Fax 03-3280-0033 <http://topmuseum.jp>
開館時間 10:00～18:00 *入館は閉館30分前まで[木・金は20:00まで。ただし、8月16日（木）、17日（金）、23日（木）、24日（金）、30日（木）、31日（金）は、サマーナイトミュージアム期間中のため21:00まで開館]
休館日 毎週月曜日（9月17日（月・祝）、24日（月・振）、10月1日（月・都民の日）、10月8日（月・祝）は開館、9月18日（火）、25日（火）、10月9日（火）は休館）
観覧料 一般 500(400)円／学生 400(320)円／中高生・65歳以上 250(200)円
※（ ）は20名以上の団体料金 ※第3水曜日は65歳以上無料 ※小学生以下、都内在住・在学の中学生および障害者手帳をお持ちの方とその介護者は無料 ※ただし、8月16日（木）～8月31日（金）の木・金曜日18:00-21:00はサマーナイトミュージアム割引（学生・中高生無料／一般・65歳以上は団体料金） *各種割引の併用はできません

このリリースのお問い合わせ先

このリリースに掲載されている図版（参考図版を除く）をデータにてご用意しております。掲載をご希望の際は、下記広報担当まで連絡ください。掲載点数が1点の場合は、展覧会メインイメージとして、本リリース1ページ目の下記図版をお薦めいたします。

作者不詳（マジック・ランタンのトレード・カード）19世紀頃 リトグラフ 東京都写真美術館蔵
そのほかA4チラシのイメージのご用意もございます。どうぞお申し付けください。

このリリースに掲載されている作品のうち、記載のないものは東京都写真美術館蔵です。図版をご掲載の際は、必ず作品キャプションおよびクレジットの表記をお願いします。図版のトリミングはできません。

東京都写真美術館 事業企画課

〒153-0062 東京都目黒区三田 1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内

Tel 03-3280-0034 Fax 03-3280-0033 <http://topmuseum.jp>

展覧会担当：遠藤みゆき m.endo@topmuseum.jp

岡村恵子 k.okamura@topmuseum.jp 田坂博子 h.tasaka@topmuseum.jp

広報担当：久代明子、平澤綾乃、前原貴子 press-info@topmuseum.jp

<資料> 展示解説パネル

1 マジック・ランタンの誕生 | The Birth of Magic Lantern

マジック・ランタンの発明は、17世紀半ば、オランダのクリスティアン・ホイヘンス（1629-95）によると考えられている。数学者・物理学者であるホイヘンスが、自身の原稿に「スライド、凸レンズ、ランタン」と書いた1659年、彼は投影型ランタンについて世界で初めて、装置に不可欠な部品を含めた説明を残した。ホイヘンスによる発明ののち、マジック・ランタンはヨーロッパ中に伝播して、18世紀半ばにはファンタスマゴリアと呼ばれる幽霊ショーに用いられ、パリを中心に人気を博した。

Magic lantern is generally held to have been invented by the Dutch Christiaan Huygens (1629–95) in the mid-seventeenth century. When in 1659, this mathematician/physicist wrote down the words “To show by means of convex glasses on the lamp” in his manuscript, he left the world's first ever account of projective lantern with a description of its essential components. Subsequently the device spread to the entire Europe. Employed in the ghost-themed show called phantasmagoria by the mid eighteenth century, it was highly popular in Paris and other cities.

2 マジック・ランタンの流行 | Magic Lantern Mania

19世紀には、マジック・ランタンは様々な改良が施され、また安価な家庭用の製品も出回るようになり、より身近な存在になった。例えば19世紀初頭に発明された「ディゾルヴィング・ビューズ」という機構は、マジック・ランタン本体に付随する金属のシャッターで、スライドを入れ替える一瞬の間シャッターを下ろし、スムーズな場面の移り変わりを演出した。こうした興行師が用いるマジック・ランタンのほか、科学投影用から玩具まで、マジック・ランタンの用途は細分化され、その形態や機能、装飾など、各製造者によって工夫が凝らされていった。

In the nineteenth century magic lantern underwent various improvements, and inexpensive, home-use versions came onto the market, further contributing to its popularity. For example, “Dissolving Views,” a mechanism developed in the early years of the century, consisted in a metallic shutter that interrupted the light beam for the very brief moment when slides were swapped, realizing a smooth transition between projections. In addition to this and other types employed by showmen, the use of magic lantern divided itself into subcategories including scientific slide projection to children's games, and its shape, function and decoration became more and more elaborate in the hands of manufacturers.

3 日本のマジック・ランタン | Magic Lantern in Japan

マジック・ランタンは日本に、2度渡来した。1度目は江戸時代、18世紀の後半に、オランダ経由で長崎に入り、江戸にまで伝わった。上方では「錦影絵」、江戸では「写し絵」と呼ばれ、日本独自の発展を遂げた。2度目は明治時代、1870年代に、手嶋精一によって欧米から持ち帰られ、「幻燈」という名で普及した。このとき幻燈は、欧米からもたらされた最新の教授法として紹介され、当時の文部省の肝いりで、各府県の師範学校に配られた。日本のマジック・ランタンは、はじめは大衆の娯楽として、のちには近代人を育てる視覚教具として、普及・定着していった。

Magic lantern's arrival in Japan occurred in two separate phases. First, during the Edo period [1603–1867], in the late eighteenth century, it entered Nagasaki via the Netherlands and was brought to Edo. In the Kyōto-Ōsaka region it was called “*nishiki kage-e*” [“colorful shadow picture”] and in Edo “*utsushi-e*” [“projected picture”], evolving into a unique form. Second, during the Meiji period [1868–1912], in the 1870s, Tejima Seiichi carried back from his Euro-American tour a magic lantern, which then spread under the name “*gentō*.” This latter was promoted as the latest Western pedagogical technique, distributed to teacher's schools across the country under the auspices of the Ministry of Education. Initially as a mass entertainment, later as a visual device for forming modern man, magic lantern thus circulated and took root in Japan.

4 スライド | Slides

スライドは、マジック・ランタンによって投影される内容(コンテンツ)である。彩色されたガラス板を、まさにスライドさせることで、複数の絵柄を連続して投影することや、絵巻物のようにつながった絵柄を流れるように見せることができる。19世紀に入りマジック・ランタンの製造業者の増加とともに、スライドも、仕掛けが複雑なものや、美しく繊細な手彩色の高級品から、簡易な印刷による大量製造品まで、幅広く製造・販売、消費された。また写真の発明によって、写真を焼き付けたスライドも登場する。スライドの内容は、物語から寓話、名所、風俗、スターや貴顕、戦争や災害などのニュースまで、多岐にわたった。

Slide is the contents magic lantern projects. By literally sliding painted glass plates, pictures can be sequentially projected, and several designs interconnected like a picture scroll can be shown as a single fluid transition. With the increase in number of magic lantern manufacturers, slides were produced, sold and consumed in a great variety. Some had complex mechanisms; others were more upscale, with elegantly subtle hand-painted images; still others were cheaply printed and mass-produced. After the invention of photography some were printed with photographic images. From narratives and parables to famous sights, manners and customs to stars and dignitaries to news of war and disasters, slides took up a wide range of subjects.

5 マジック・ランタン以後 | After Magic Lantern

19世紀末、トーマス・エジソンによってキネトスコープが発明され、リュミエール兄弟によってシネマトグラフが発明された。どちらも動く像を見せる機械だが、一度に多くの人々が集い見ることができるシネマトグラフに人気が集まった。映画が娯楽として定着したのちも、マジック・ランタンは消えてなくなることはなく、その仕組みやアイデアは現代まで受け継がれている。映写機による投影も、プロジェクション・マッピングも、さらにはプレゼンテーションに使用する「スライドショー」も、すべてマジック・ランタンから始まる、プロジェクションの歴史のなかにある。

In the late nineteenth century kinetoscope was invented by Thomas Edison and *cinématographe* by the Lumière Brothers. These were machines to show moving images, though the latter turned out to be more popular thanks to its ability to be seen at once by multiple spectators. Even after cinema took over as predominant form of entertainment, magic lantern did not simply disappear, its apparatus and ideas living on to this day. Modern projectors, projection mapping, “slide show” in a PowerPoint presentation— they all belong to the same history that began with magic lantern.

小金沢健人はあるインタビューで、映像は、動いていること、またサイズ可変であり、スイッチ一つで幻のように消えてしまう点が面白いのだと述べている。これらはまさに、投影されたイメージがもつ、最大の特徴である。

本展にあわせ、小金沢は新たな作品を制作した。マジック・ランタンの歴史を辿る本展がこれまで明らかにしてきたように、マジック・ランタンの特徴の一つに、投影するスクリーンを選ばないこと、つまり、イメージを投影できる対象すべてがスクリーンになることが挙げられる。あらかじめ決められた画角のなかで物語が進行する映画とは、決定的に異なる点である。本作では、1時間で1周するプロジェクターによって、360度の投影が展示室内でおこなわれる。映し出されるのは、小金沢によって呼び出された、幽霊たちである。

ファンタスマゴリアや降霊術がもてはやされた当時、人々は恐ろしい亡霊に恐怖するだけでなく、今は亡き懐かしい人々——幽霊に出会うために霊媒師のもとを訪れたという。マジック・ランタン、つまり投影装置とは、幽霊や幻影に出会いたいと願う多くの人々の願いをかなえるため、科学の力を借りて生み出された、人類最大の発明品なのではないだろうか。くしくも冒頭で示した映像と、幽霊の特徴は、非常に近いのである。

In an interview, Koganezawa Takehito said that what interests him in *eizō* [projected and/or moving images] is their movement, the variability of their size, and the fact that they can disappear with just a flick of switch, like a phantom. These are precisely the most defining characteristics of such images. Koganezawa has produced two new works for the present exhibition. As repeatedly demonstrated in this show, one feature of magic lantern is that the device can cast its image on any kind of screen. In

other words, any object on which it projects thereby becomes a screen—a crucial difference from cinema, in which the narrative unfolds strictly within a predetermined angle of view. In Koganezawa's new works, a projector goes on casting its image 360 degrees in a room as it rotates at the rate of one revolution per hour. What we see in the projection is ghosts conjured up by the artist.

When phantasmagoria and necromancy were at the height of their popularity, it is said that people visited the mediums not just for the frisson of terrifying phantoms but to meet the dead dear to them—ghosts. Perhaps magic lantern, or projector, is the greatest human invention, created with the help of science in order to fulfill the wish many have to meet specters and apparitions. It is curious that eizō, as shown at the outset, shares a good deal of its characteristics with ghosts.